

筆道資料の探訪

明治期書道と筆

明治時代初期は、御家流が衰滅し、次に唐様が衰亡の余香を放った時でした。

このような時代、即ち明治十三年、清国公使の随員として来朝した揚守敬が、中国から碑版法帖一万数千部を携えて六朝書道を鼓吹しました。それに共鳴した日下部鳴鶴、巖谷一六、松田雪柯等がこれを唱道し、六朝書道の黄金時代を現出しました。鳴鶴は、六朝風を最もよく体得した代表者ですがそれをそのまま再現したので

はなく、六朝書道を中心として漢、初唐の書風を加味して独特の書風を作り出しています。これら当時の書道家たちは、

純羊毛の中鋒・長鋒の筆を愛用しています。筆匠、勝木平成が「御物天平筆」の復原模造に成功したのは、明治十四年頃で、高木壽穎が、梁山舟の「筆史」を翻刻したのは翌十五年です。筆匠「温恭堂」が鳴鶴の依頼で製した長鋒純羊毛筆は、唐筆にまさるといわれ一六・梧竹・も用筆を詠えています。

明治三十年頃から、唐様書風の用筆であった短鋒筆(糊固筆)が次第に長鋒の羊毛筆へと移り、ここに様式的一大変遷を見ることに至りました。

筆は、長鋒に限るといふ風潮が一般に広まり、書道家は勿論全国各地の諸学校においても柔らかな羊毛の長鋒筆を全部おろして使用することが流行したのです。

この長鋒筆は、使用後は鋒を水で洗っておくという使用法で、糊固筆に対して捌筆と呼ばれるようになった。このように六朝風書道が漸次勢を得てきたとはいえ、一面にはこれに対抗する流派もあり菱湖流がそれで、巻菱潭、村田海石、西川春洞等がその代表的人物です。特に海石は菱湖流から出て独創的な書風を樹立し

ました。

この書風は穩健中正といわれるもので、謹厳であつて最も学び易かつたために大衆の間に迎えられるかつまた書道教育文字として好適でした。

明治三十七年国定小学書方本が制定され門弟の日高秩父が執筆し、そのため撰定筆でした。やや短鋒に近い中鋒兼毛筆が相当流行しましたが鳴鶴流の研究者が多数で漸次庄倒されたので



▲比田井天来書(町資料館蔵)

す。これによつて鳴鶴流が明治時代の一世を風靡することとなりました。